

高知県香美郡土佐山田町

土佐山田北部遺跡群

— 山田北部県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書 —

1992年3月

土佐山田町教育委員会

序

土佐山田町は物部川の西岸に広がる田園地帯を占めており、古くから文化の栄えた地域です。北部の山裾部から長岡台地上、さらには香長平野にかけて多数の遺跡の所在が確認されています。これらの遺跡は過去の人々の生活の証であり、過去から現在への無言のメッセージです。このメッセージの中には先人達の培ってきた英知が込められており、現代に生きる我々は、未来へ向けて共有の財産として遺跡を継承しなければなりません。

しかしながら、自然多きこの土佐山田町にも開発の波は押し寄せています。各種の開発工事とともに農業基盤整備事業も重要な施策として押し進められており、その規模は拡大の一途であります。農業という基幹産業の発展には欠かせない事業ではありますが、広範囲におよぶため遺跡が含まれることも多く、その保存には努力がはらわれているところです。

今回の山田北部県営ほ場整備事業においても多数の遺跡が工区内に所在しており、現状保存を基本として開発と保護の調和のため調整が行われました。しかし遺跡の内容、範囲等については資料不足であり、試掘調査による確認が必要とされましたので国庫補助を受けることにより、ほ場整備計画地内の試掘調査が実施されることとなりました。

調査の結果については本書の内容をみていただくこととして、試掘調査を実施することにより事前の調査及び保存については計画的に進めることができました。また、各遺跡の資料としても本書が活用されれば幸いです。

最後になりましたが、試掘調査を実施するにあたっては地元地権者の方々の御理解をいただいたことに厚く感謝いたします。さらには土地改良区の皆様をはじめとし、県耕地課、南国耕地事務所、県教育委員会、町産経課等関係各位からの御協力と御配慮に御礼申し上げます。

平成4年3月

土佐山田町教育委員会

教育長 岡 本 章 博

例　　言

1. 本書は山田北部県営は場整備事業に伴う土佐山田北部遺跡群の試掘調査報告書である。
2. 試掘調査は土佐山田町教育委員会が調査主体となり、は場整備計画に基づき昭和63年度から平成3年度の4年間にわたり、国庫補助事業として実施された。
3. 遺跡の名称としては土佐山田町の北部地域が対象となるため、土佐山田北部遺跡群と呼称した。
4. 調査対象地はは場整備計画地全域として、昭和63年度一予岳・前行地区、平成元年度一須江地区南部、平成2年度一須江地区北部、平成3年度一須江・横地区に調査を実施した。
5. 調査体制は次のとおりである。

総括	昭和63～平成3年度	依光征二郎（土佐山田町教育委員会社会教育課長）
庶務	昭和63～平成2年度	吉村 泰典（　　〃　　社会体育係長）
	平成3年度	中山 泰弘（　　〃　　社会教育課主事補）
調査	昭和63～平成2年度	森田 尚宏（高知県教育委員会文化振興課主幹）
	平成3年度	中山 泰弘（土佐山田町教育委員会社会教育課主事補）
6. 本書の執筆、編集は森田・中山が行った。
7. 本文中に使用した地形図は南国耕地事務所及び山田北部地区土地改良区から提供を受けた1/5,000及び1/2,500の地形図を原図として使用させていただいた。また、航空写真はアジア航測撮影写真を使用させていただいた。
8. 本文中の試掘グリッド設定図の■印はグリッドの位置を示すものであり、縮尺は無関係である。
9. 調査にあたっては、地元地権者の方々をはじめとして御協力、御援助をいただいた関係各位の皆様に対し、記して感謝の意を表する次第である。
10. 出土遺物等の資料については土佐山田町教育委員会において保管している。また、遺物の注記等には次の略号を使用した。

昭和63年度（第1次試掘）	—88Y H 1	平成元年度（第2次試掘）	—89Y H 2
平成2年度（第3次試掘）	—90Y H B 3	平成3年度（第4次試掘）	—91Y H B 4

本文目次

I 調査の契機と経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
1 位 置	2
2 歴史的環境	2
III 各年度の調査	7
1 第1次試掘調査	7
2 第2次試掘調査	15
3 第3次試掘調査	16
4 第4次試掘調査	16
IV まとめ	17

挿図目次

Fig. 1 土佐山田町位置図	1
Fig. 2 調査対象地区位置図	3
Fig. 3 周辺遺跡分布図	4
Fig. 4 各年度別調査対象地図	7
Fig. 5 試掘グリッド設定図 1	9
Fig. 6 試掘グリッド設定図 2	11
Fig. 7 試掘グリッド設定図 3	13
Fig. 8 A区出土遺物	18
Fig. 9 A・B区出土遺物	19
Fig. 10 B・C区出土遺物	20
Fig. 11 C区出土遺物	21

表目次

Tab. 1 周辺遺跡表	5
Tab. 2 各年度別調査表	8

写真図版

PL. 1 B・C・D地区	
PL. 2 B・C・D地区	
PL. 3 A・D・E地区	
PL. 4 A地区	
PL. 5 各グリッド遺物出土状態 1	
PL. 6 各グリッド遺物出土状態 2	
PL. 7 各グリッド遺物出土状態 3	

報告書要約

1. 遺跡名　土佐山田北部遺跡群（山田北部県営は場整備対象地内所在遺跡）
2. 所在地　香美郡土佐山田町、須江・植・新改・予岳・前行地区
3. 立地　新改川及び土生川の河岸段丘及び沖積地
4. 種類　弥生時代～近世
5. 調査主体　土佐山田町教育委員会
6. 調査契機　は場整備事業に伴う事前の試掘調査
7. 調査期間　昭和63年度～平成3年度
8. 調査面積　1,354m²
9. 検出遺構　ピット、土坑、溝、竪穴住居跡
10. 出土遺物　弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、備前、青磁、石斧
11. 内容要約　は場整備事業に先立つ試掘調査であり、昭和63～平成3年度の4ヶ年間にわたり実施された。調査対象地には古墳、須恵器痕跡等の所在が知られており、分布調査では須恵器、土師器等の散布地も多く存在していた。特に須江地区には散布地が多く、その地名を考えればしかるべき遺跡の存在が考えられた。結果的には後世の段畑造成等により搅乱、削平を受けた地域が多く、遺構として確認されたものは少なかった。しかし、遺物は多数出土する地点があり、工事との調査を行った結果、4ヶ所について事前の発掘調査による記録保存が必要とされた。

I 調査の経機と経過

山田北部地区県営は場整備事業は、土佐山田町の北部一帯を対象とした広範囲に及ぶは場整備事業であり、昭和62年度より工事は開始されている。以後、現在も各工区について地元調整を行いながら平成8年度の完了を目指し、事業は進捗中である。

当ほ場整備事業範囲内には多数の埋蔵文化財包蔵地が含まれており、さらには須恵器生産にかかる地域と考えられる須江地区の全域も対象となっていることから未確認の遺跡の所在が考えられた。また、ほ場整備事業の概要が県教委及び上佐山田町教育委員会に示された時点では、県教育委員会が進めていた県内の遺跡詳細分布調査は幡多ブロックを実施中であり、土佐山田町内の遺跡分布については不明な点が多く、広範囲にわたる工事に対応するためには事前の試掘調査が必要とされた。各工区について事前の分布調査を順次行ったが、水田が多く遺物の採集は困難であった。しかしながら須江地区については、やはり全面に須恵器、土師器片等の分布がみられ、当地区における遺跡の範囲、性格を正確に把握することが必要と考えられた。

以上の経緯を経て、事業者である南国耕地事務所及び山田北部土地改良区、土佐山田町、県教育委員会、土佐山田町教育委員会の5者をもって埋蔵文化財包蔵地の扱いについて協議が行われた。その結果、各工区の事業施行の前年度に土佐山田町教育委員会が主体となり、国庫補助を受け試掘調査を実施することとなった。事業施行にあたっては、試掘調査の結果を基に現状保存を図るために設計変更を行い、困難な場合には発掘調査による記録保存を実施することとした。

試掘調査は事業計画に基づき昭和63年度（第1次調査）に前行・子岳地区、平成元年度（第2次調査）に須江地区南部、平成2年度（第3次調査）に須江地区北部と横地区の一部、平成3年度（第4次調査）に須江・横地区を行った。なお、昭和62年度には当ほ場整備事業が野寺・メウカイ地区から開始されたため、土佐山田町において急遽試掘調査が実施された。その結果、一部において弥生及び中世の遺物の出土をみたが、盛土工法の範囲内であり、発掘調査実施には至らなかった。

調査は切土工法部分及び水路・道路部分を中心とし、さらに地形等も考慮に入れ、任意の2×2mグリッドにより行った。調査対象地の中でも重機の搬入路が確保された部分については重機により、他はすべて人力により調査を進めた。第1次から第4次調査の中で記録保存のため本調査を実施することとなった地区はやはり須江地区であり、4地点での発掘調査が必要とされた。また、前行・子岳地区では古墳の所在が明らかとなっていたが、設計変更により保存されることとなつた。



Fig.1 土佐山田町位置図

II 遺跡の位置と環境

1 位 置

今回のは場整備事業の対象となったのは、土佐山田町の中心部の北部に広がる平地部を中心であり、新改川（中・下流域は国分川）と土生川の河岸段丘及び沖積地である。現況をみれば、須江地区は水田を中心として畑地が混在しており、段丘面上では畑地とビニールハウスが多くなっている。植・新改・前行・予岳地区では、段丘面から山麓部にかけて段畑及び水田が谷筋に広がっている。町域の南部に広がる香長平野に比較して、北部の国分川水系の平野部は下流域では広がっているが、土佐山田町内では須江地区を除き狭い田畠であり、人家は山裾部に集中している。また、田畠の現況は、旧地形を基にした不整形をしており、農道もきわめて狭く、耕作は非能率的であった。

須江地区は新改川（国分川）の沖積面と河岸段丘であるが、沖積面は南部で標高25～26mを、北部では標高30m前後を測り、逐々に高くなっている。田畠の畔からは蛇行する旧流路の跡をみるとことができ、新改川の氾濫原であったことを知ることができる。段丘面は2面あり、下位の段丘面は下方の沖積面から比高2～3mの段丘崖により形成されている。標高は南部29mから北部35mを測り、北へとやはり高くなっている。上位の段丘面は東部の県道繁藤・西町線をほぼ境界として、南部では比高4m前後の段丘崖が存在し、山裾部へと移行する。新改地区では新改川・植・前行・予岳地区ではほぼ東西に流れる土生川の南北の山裾部を段畑・水田としており、標高50m前後を測る。前行・予岳地区の中間には小丘陵が存在しており、この周辺がやや広く開けており、小段丘面がみられる。

2 歴史的環境

土佐山田町の歴史の中で現在のところ最も古くさかのぼるのは、飼古屋岩陰遺跡である。当遺跡は町内でも北部山間に位置し、吉野川の支流穴内川上流の山麓部に突出する岩塊下の岩陰遺跡である。高速道工事による事前調査が行われており、縄文時代早期の押型文土器及び多量の石器を出土しているが、弥生土器、須恵器等も混在しており、2次堆積と考えられる。

次に弥生時代に入ると、縄文時代の遺跡の分布に比して遺跡数が増大する。しかしながら弥生時代前期の遺跡は未発見であり、中期以降、特に後期後半から爆発的に増加する。中期の遺跡としては県下的に著名な龍河洞穴遺跡をあげることができる。中期後半の一括資料が出土しており、龍河洞式土器の標式遺跡となっている。また、平野部の遺跡としては、物部川の新規刷状地上の稲荷前遺跡、原遺跡、原南遺跡の調査が行われており、稲荷前遺跡では竪穴住居跡1棟、原遺跡では竪穴住居跡1棟、溝跡等が検出されている。集落全体は不明であるが中期中～後半の様相の一端を知ることができる。後期では後半のヒビノキ式土器の標式遺跡であるひびのき遺跡、ひびのきサウジ遺跡、林田遺跡等の調査が行われており、土佐山田町の段丘上か



Fig. 2 調査対象地区位置図

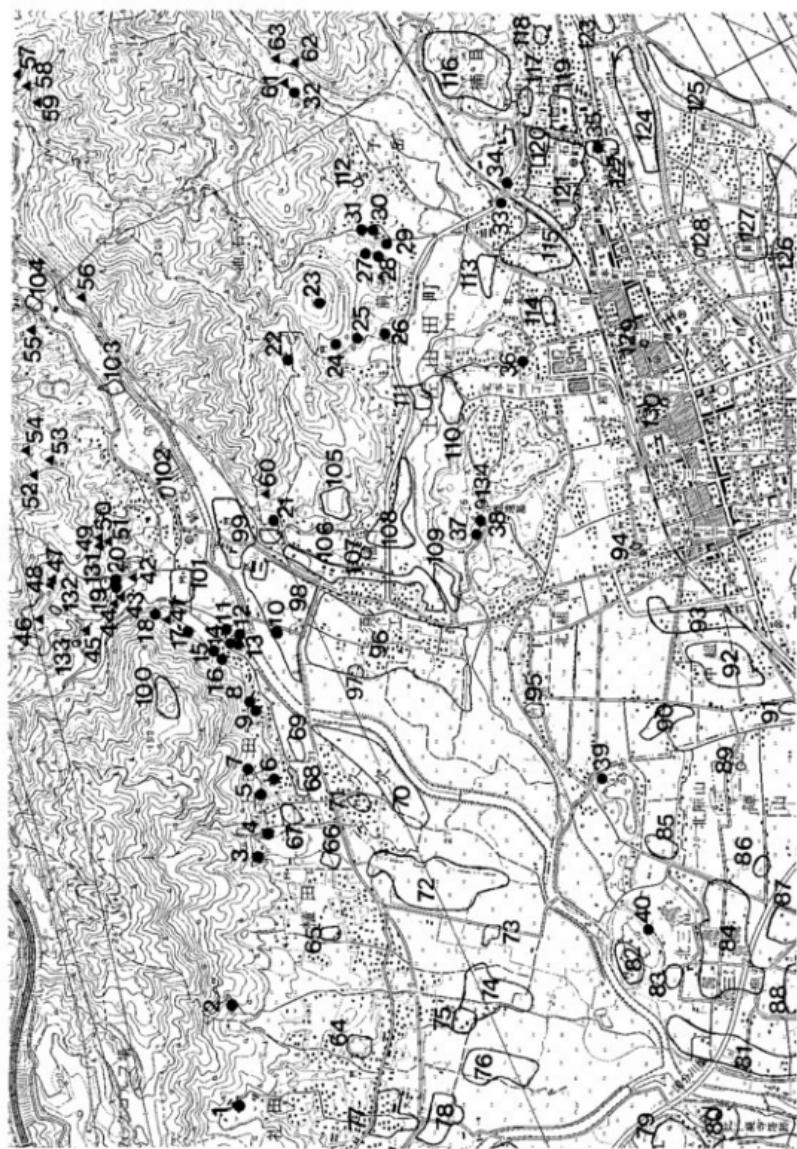


Fig.3 周辺遺跡分布図($S=1/25,000$)

番号	遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1	中山田古墳	古墳	大塚古墳	古墳	35	大塚古墳	古墳	69	東山田	古墳	弥生~古墳	國三	反山田	古墳	平安	安
2	高松古墳群	古墳	八王子西古墳	古墳	36	八王子西古墳	古墳	70	改田神母	古墳	古墳~平安	國四	入野南	古墳	平安	平安
3	横田古墳群	古墳	前山1・2号墳	古墳	37	前山1・2号墳	古墳	71	久次マツノ原	古墳	古墳~平安	國五	植木下	古墳	平安	中世
4	久保古墳	古墳	前山3・5号墳	古墳	38	前山3・5号墳	古墳	72	久次マツノ原	古墳	古墳~平安	國六	植木下	古墳	平安	古墳
5	次郎ヶ谷西古墳	古墳	降山古墳	古墳	39	降山古墳	古墳	73	煩ヶ田	古墳	古墳~平安	國七	植木下	古墳	平安	中世
6	次郎ヶ谷古墳	古墳	三島山古墳	古墳	40	三島山古墳	古墳	74	泉ヶ内	古墳	古墳~平安	國八	植木下	古墳	平安	近世
7	田村氏古墳	古墳	内宮跡	古墳	41	西ノ内宮跡	古墳	75	沖ノ土居	古墳	古墳~平安	國九	モジリカワ遺跡	モジリカワ遺跡	平安	中世
8	龜ヶ谷1号墳	古墳	小山田1号窓跡	古墳	42	小山田1号窓跡	古墳	76	中ノ土居	古墳	古墳~平安	國十	ノクモ丸遺跡	ノクモ丸遺跡	平安	中世
9	龜ヶ谷2号墳	古墳	小山田3号窓跡	古墳	43	小山田3号窓跡	古墳	77	中ノ土居	古墳	古墳~平安	國十一	植木下	古墳	平安	中世
10	賀江人冢古墳	古墳	西谷1・2・3号窓跡	古墳	44	西谷1・2・3号窓跡	古墳	78	前鳴	古墳	古墳~平安	國十二	田氏代墓所	サキ遺跡	平安	中世
11	新改古墳	古墳	余良	古墳	45	余良	古墳	79	比江	古墳	古墳~中世	國十三	カイ遺跡	カイ遺跡	平安	中世
12	新改2号墳	古墳	東谷松本窓跡	古墳	46	東谷松本窓跡	古墳	80	比江	古墳	古墳~中世	國十四	長谷川丸遺跡	長谷川丸遺跡	古墳	中世
13	新改3号墳	古墳	奈良	古墳	47	奈良	古墳	81	測河	古墳	白鳳~奈良	國十五	快原遺跡	快原遺跡	奈良	平安
14	新改4号墳	古墳	東谷2号窓跡	古墳	48	東谷2号窓跡	古墳	82	神母	古墳	古墳~平安	國十六	植木下	古墳	平安	中世
15	柏山1号墳	古墳	林ノ谷1号窓跡	古墳	49	林ノ谷1号窓跡	古墳	83	三島	古墳	古墳~平安	國十七	植木下	古墳	平安	中世
16	柏山2号墳	古墳	林ノ谷2号窓跡	古墳	50	林ノ谷2号窓跡	古墳	84	三島	古墳	古墳~平安	國十八	田所神社	田所神社	平安	中世
17	西ノ内1号墳	古墳	林ノ谷3号窓跡	古墳	51	林ノ谷3号窓跡	古墳	85	三島	古墳	古墳~中世	國十九	ひびのき	ひびのき	平安	中世
18	西ノ内2号墳	古墳	大谷1号窓跡	古墳	52	大谷1号窓跡	古墳	86	白山	古墳	古墳~中世	國二十	御母母遺跡	御母母遺跡	平安	中世
19	小山田1号墳	古墳	大谷2号窓跡	古墳	53	大谷2号窓跡	古墳	87	水通	古墳	古墳~中世	國廿一	ひびのきサワシ遺跡	ひびのきサワシ遺跡	平安	中世
20	小山田2号墳	古墳	大谷3号窓跡	古墳	54	大谷3号窓跡	古墳	88	留重	古墳	古墳~中世	國廿二	大塚遺跡	大塚遺跡	平安	中世
21	タシガシ古墳	古墳	八ノ谷窓跡	古墳	55	八ノ谷窓跡	古墳	89	有光	古墳	古墳~中世	國廿三	西山遺跡	西山遺跡	平安	中世
22	深坂古墳	古墳	七セガイ	古墳	56	七セガイ	古墳	90	派遣	古墳	古墳~中世	國廿四	山田三ツ又遺跡	山田三ツ又遺跡	平安	中世
23	板栗古墳	古墳	七セガイ	古墳	57	七セガイ	古墳	91	山田三ツ又	古墳	古墳~中世	國廿五	植木下	古墳	平安	中世
24	中沢古墳	古墳	大太寺	古墳	58	大太寺	古墳	92	山田三ツ又	古墳	古墳~中世	國廿六	原原遺跡	原原遺跡	平安	中世
25	溝瀬古墳	古墳	大太寺	古墳	59	大太寺	古墳	93	山田三ツ又	古墳	古墳~中世	國廿七	古町西遺跡	古町西遺跡	平安	中世
26	桜ヶ谷古墳	古墳	大太寺	古墳	60	大太寺	古墳	94	谷原	古墳	古墳~中世	國廿八	古町北遺跡	古町北遺跡	平安	中世
27	崩行山1号墳	古墳	岳	古墳	61	岳	古墳	95	野原	古墳	古墳~中世	國廿九	神社	神社	平安	中世
28	崩行山2号墳	古墳	長谷山1号窓跡	古墳	62	長谷山1号窓跡	古墳	96	須江	古墳	古墳~近世	國三十	江上殿	江上殿	平安	中世
29	神母古墳	古墳	長谷山2号窓跡	古墳	63	長谷山2号窓跡	古墳	97	須江	古墳	古墳~中世	國三十一	井戸2号	井戸2号	平安	中世
30	大元神社古墳	古墳	大元神社	古墳	64	東ノ土居	古墳	98	須江	古墳	古墳~中世	國三十二	北遺跡	北遺跡	平安	中世
31	大元神社北古墳	古墳	大元神社	古墳	65	植木下	古墳	99	葛原	古墳	古墳~中世	國三十三	寺	寺	平安	中世
32	岳古墳	古墳	岳古墳	古墳	66	寺中	古墳	100	改田	古墳	古墳~中世	國三十四	勝	勝	平安	中世
33	熊野學園古墳	古墳	熊野學園	古墳	67	北野	古墳	101	須江	古墳	古墳~中世	國三十五	寺	寺	平安	中世
34	小倉山古墳	古墳	小倉山古墳	古墳	68	山谷	古墳	102	須江	古墳	古墳~中世	國三十六	前田	前田	平安	中世

Tab. 1 周邊清跡表

ら長岡台地上にかけて後期後半の集落の立地が確認されている。

古墳時代では後期の横穴式石室を有する古墳の存在が多く知られている。古墳は須江地区から植、前行・子岳地区的山麓部を中心に分布しており、過去の開墾等により破壊された古墳も多いが、小倉山古墳等現状で残されているものも数少なくない。当は場整備事業計画地内にも9基の古墳の所在が知られているが、桜ヶ谷1～3号墳、前行山2号墳、大元神社古墳、須江大塚古墳の6基はすでに破壊されている。桜ヶ谷1～3号墳は3基であったが残されていない。また、須江大塚古墳は明治時代の開墾により削平されており、円形の水田としてのみその存在を知ることができる。他の前行山1号墳、神母古墳、大元神社北古墳では一部崩壊もみられるが、石室が残されている。古墳以外の遺跡は少なく、5世紀以降の集落跡等は未発見である。また、古墳と同じく北部の山麓部には須恵器の窯跡が多く存在しており、古墳時代の窯跡は10ヶ所を数える。

古代にかけては、須恵器等の散布により奈良・平安時代とみられる遺跡も存在するが、その詳細は不明である。調査が行われた遺跡としては、ひびのきサウジ遺跡、稻荷前遺跡等があり、ひびのきサウジ遺跡では10～11世紀の黒色土器、土師器を多量に出土した井戸跡が検出されており、古代の土器編年を考える上で重要な一括資料となっている。ほ場整備事業地内では、須江地区に須江上段遺跡、須江北遺跡、葛原神社遺跡が沖積面から段丘面にかけて広範囲に広がっており、須恵器、土師器が多量に表採されている。北部山裾には古墳時代以降の須恵器窯跡が20ヶ所ほど知られており、須江という地名を考えても須恵器生産に関する重要な遺跡と考えられた。さらには須江上段遺跡内には南海道の駅家跡ではないかとされる区画がみられ、「長宗我部地検帳」では築地に囲まれた草原が記されており、注目される。窯跡の中には下流の比江魔寺跡の瓦を焼成したタンカン窯跡も存在し、国分川による水運を考えれば須江古窯跡群は国府等と密接な関係があったと思われる。なお、現在のところ7～8世紀を中心とする古代の状況を知ることのできる遺跡の調査は行われておらず、須江地区を中心とする地域の調査が期待される。

中世の土佐山田町を語る発掘調査は数少ないが、山田氏の居城とされる楠目城跡の他にも中世城跡が多く残されており、物部川右岸に位置する高柳土居城跡の調査が、同様には場整備事業に伴い行われている。高柳土居城跡は現況でも一部土塁を残す方形の土居城（城館跡）であり、土塁の外には堀跡ではないかとみられる長方形の水田が存在し、調査対象となった。調査の結果、堀跡が検出されるとともに土師質土器等の遺物も出土し、土佐山田町における中世城跡調査の初例となった。

以上のように須江地区では古代を中心とする遺跡の存在が考えられ、古墳及び須恵器窯跡のあり方からみれば七佐山田町でも最も重要な地域であり、高知県の歴史的発展を解明するうえでも欠くことのできない位置を占めている。

III 各年度の試掘調査

山田北部県営は場整備事業に伴う試掘調査は、国庫補助事業により昭和63年度から平成3年度までの4ヶ年にわたり実施された。調査方法としては、各年度の調査対象地の中で地形、田畠の状況等を考慮し調査地点を定め、地権者の承諾が得られた地点をグリッドにより試掘を行った。グリッドは 2×2 mを基準とし、任意の位置に設定し、調査後はすべて埋戻した。調査は農道等から重機の搬入が行える地点については重機を使用し、他は人力により掘り下げた。遺構、遺物の検出状態からみて必要と考えられた部分については拡張し、その範囲、性格を確認することとした。各年次の調査面積、期間等については、次表のとおりである。

1. 第1次試掘調査

第1次試掘調査は、前行・予岳地区を対象地として昭和63年度に実施された。対象地は土生川の中流～上流域にかけてあり、段畑、水田が中心であった。A地区とすることとし、グリッドはA1～73までの73個を設定した。A33については土師器の出土をみたため拡張することとした。遺構を検出したグリッドは7ヶ所であったが、溝、土坑であり、近世以降の遺物が出土している。遺物はほとんどのグリッドから出土するが、客土中からの出土が多く、田畠の開墾により擾乱を受けているようである。大元神社の南では、周囲に古墳（前行山1・2号墳、

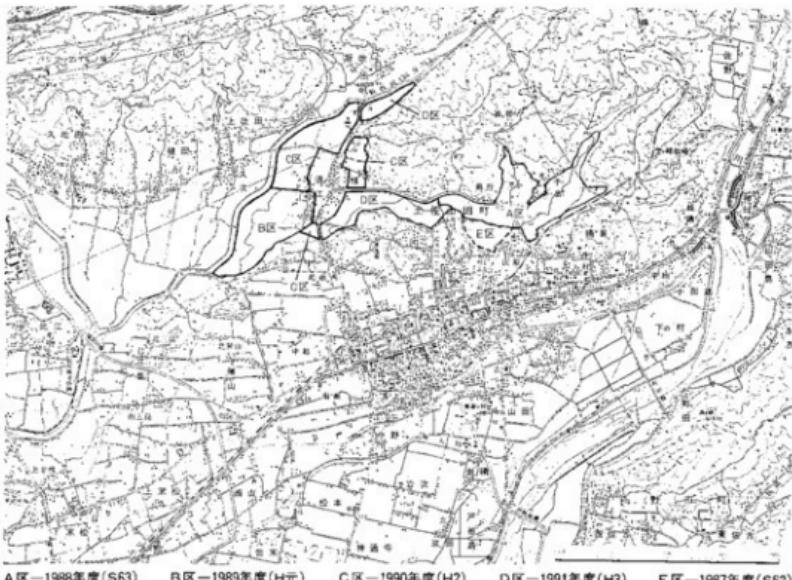


Fig. 4 各年度別調査対象地図

神母古墳、大元神社古墳、大元神社北古墳)が存在することもあり、A30~33で土師器が集中的に出土している。A33の遺構はピット及びシミ状の黒褐色土のプランが確認され、完掘したところ、すべてがつながり不定形の土坑状となった。拡張区においても不定形の土坑ばかりであり、住居跡等の遺構は検出されなかった。土坑の埋土は黒褐色土に黄褐色土ブロックの混る汚れた土であり、遺構のほとんどは二次的擾乱を受けているものと考えられた。

出土遺物としては、高杯、壺、甕がみられ、1~7はA30、8はA32、9~12・15はA33、13はA36から出土している。1は高杯の杯部であり、やや丸味をおびた底部より体部は外傾し立ち上り、口縁は大きく外反する。2は球形の胴部をもつ壺であり、最大径は19.7cmである。3も球形の胴部をもつ壺であり、最大径29.0cm、口縁部は屈曲して開く。外面はタタキ目をハケ調整、内面は一部にハケ目を残し上胴部は指ナデ、接合痕をみるとできる。4は緩やかに外反する口縁部をもつ甕であり、最大径は15.8cmである。5・7は緩やかに外反する口縁部に球形に近い胴部をもつ壺であり、口縁下はやや張りをもち肩部となる。5の口径は15.2cm、7の口径14.0cmである。6は丸底の底部であり、内面にはヘラ削りがみられる。8は小型の壺であり、口径14.0cm、器高17.6cmである。口縁は外傾し開き、上胴部に最大径(16.4cm)をもち、丸底である。外面は下胴部にハケ目を残し、内面は胴部ヘラ削り、口縁下は指ナデ調整である。9は3とはほぼ同様な形態をもつ壺であり、最大径は29.5cm、外面に右下りの斜行タタキ目を残し、内面はハケ調整である。10はやや長胴の壺であり、口縁部は5と同様に直立する短い頸部から小さく外反する。最大径は27.8cm、口径は17.0cmを測り、外面はタタキ目にハケ調整を施す。内面は指ナデである。11は8と同じく外傾する口縁部であり、口径14.0cmを測る。12は上胴部に最大径(24.6cm)をもつ卵形の胴部であり、外面はタタキ目にハケ調整を施し、内面はハケ目に指ナデ調整である。13は丸底の底部に球形の胴部をもち最大径は23.6cmを測る。外面タタキ目にハケ調整、内面はハケ目に指ナデ調整である。15は土師質土器杯であり、A33拡張区から出土している。14はA71の水田から過去に採集された磨製石斧であり、泥質片岩を使用している。以上の結果からみれば、大元神社周辺にはすでに擾乱を受けているが、3~4世紀の集落的な遺跡が存在していたと考えられる。

試掘調査	年 度	調査期間	調査面積・グリッド	調査対象区	は場整備工区
第1次試掘調査	昭和63年度	昭和63年10月26日 12月10日	364m ² A 1~73	前行・予岳地区	楠日工区
第2次試掘調査	平成元年度	平成元年10月12日 12月22日	290m ² B 1~67	須江南地区	須江工区
第3次試掘調査	平成2年度	平成2年11月26日 平成3年2月6日	456m ² C 1~116	須江北地区	須江工区
第4次試掘調査	平成3年度	平成3年12月16日 12月26日 平成4年2月18日 2月28日 3月25日	244m ² D 1~61	新改地区 植地区	新改工区 植工区

Tab.2 各年度調査表



Fig. 5 試掘グリッド設定図 1

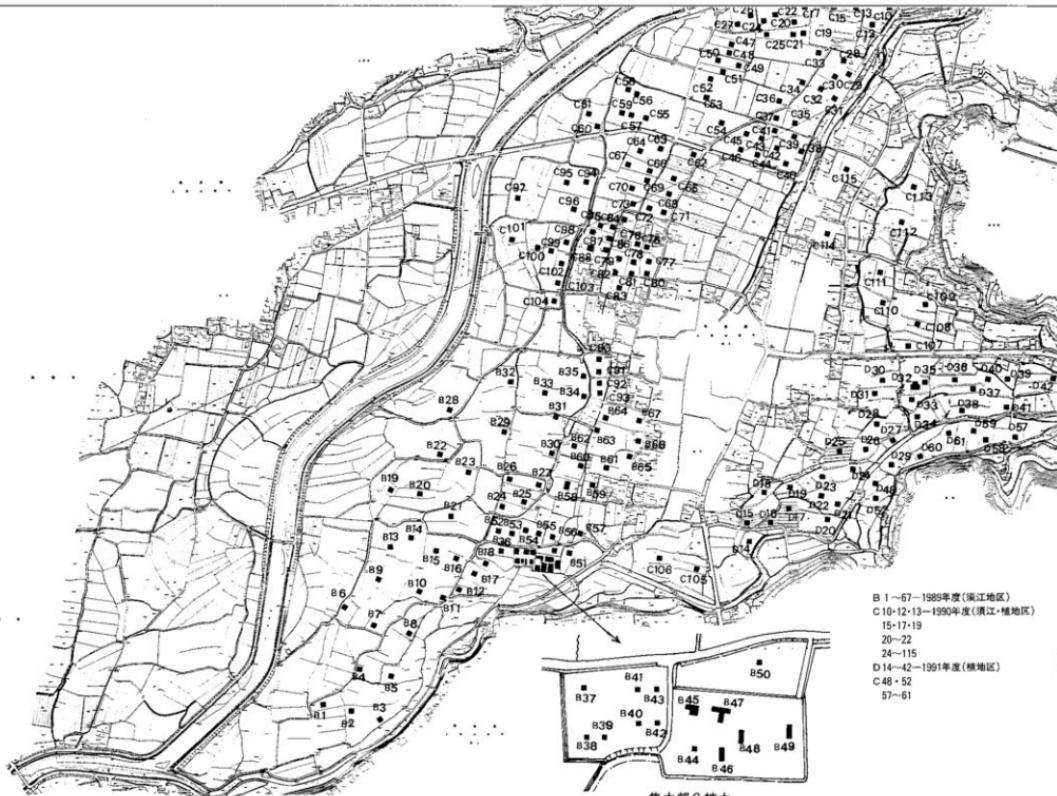


Fig. 6 試験グリッド設定図



A 1～73—1998年度(前行・予岳地区)
D 43～47—1991年度(植地区)
49～51
53～56

Fig. 7 試掘グリッド設定図 3

2. 第2次試掘調査

第2次試掘調査は、平成元年度に須江地区南半部をB地区として実施した。B地区は新改川の沖積面及び下位の段丘面が対象であり、水田及び畑地にビニールハウスが点在している。2×2mグリッドB1～67まで67個を設定し、南より順次試掘を行った。沖積面に設定したグリッドでは少量の須恵器、土師器の出土をみたものの、かなり磨耗しており、流れ込みによる2次堆積と考えられ、遺構も検出されなかった。下位段丘面では、耕作土下に地山の黄褐色粘質土及び砂利層がみられるグリッドが大半を占め、須恵器等が若干出土するが、広範囲な削平を受けていると考えられる。しかしながら、下位段丘面の南端部に設定したB37～49グリッドの畑地では多量の須恵器、土師器が表採されており、試掘調査の結果としても、溝状遺構を検出するとともに、良好な遺物出土状態を確認することができた。特にB45・47では溝状遺構を確認したため拡張し、B46・48・49においても地山を掘り込むプランが検出されたので2×4mのグリッドとした。B37・39では耕作土下に土師器の細片を多量に含む茶褐色粘質土が50～70cmみられ、須恵器等も出土することから2次堆積ではあるが、周辺に良好な遺構等の存在が考えられた。また、B38では50cmほどの黒ボク土中に赤橙色粘質土が存在しており、火山ガラスがみられることから赤ホヤ火山灰と考えられるが、遺物の出土は少量であった。

出土遺物は須恵器、土師器であり、壺、杯、高盤、土鍤等がみられる。16～19はB40、20～36はB47の溝状遺構、37・38はB43から出土している。16～18は須恵器長頸壺とその口縁部であり、緩やかに外反し開き、16・17には2本の沈線がみられる。16は肩部の最大径12.8cm、17の口径10.0cm、18の口径10.4cmを測る。19は高台を有する須恵器杯であり、口径14.0cm、底径10.4cm、器高4.6cmを測る。20～24は須恵器の杯蓋であり、24はつまみを欠くが他はわずかに宝珠形及び偏平なつまみをもち、口径は14.4～15.5cmを測る。23は大きく焼き歪みがみられる。25～29は無高台の杯であり、25・26は土師器、27～29は須恵器である。25は口径15.6cm、器高4.2cm、外面はヘラ磨き、内面口縁部に浅い沈線がみられる。26は口径14.8cm、器高はやや深く5.4cm、内外面ともにヘラ磨きが施される。27は口径14.0cm、器高4.1cm、28は口径15.0cm、器高4.0cmとほぼ同じ法量をもつ。29は口径15.0cm、器高6.2cmと深く、体部は内湾気味に立ち上る。30～34は高台を有する杯であり、30・31は須恵器、32～34は土師器である。30・31は口径12.8と13.0cm、器高は3.8cmを測り同法量であるが、30の高台は外傾する。32・33は口径18.2と19.8cm、器高5.8と6.5cmを測り、大振りであるが、32の口縁はやや外反する。34は底径15.2cmであり、32・33と同様の法量をもつ杯底部である。35は口径22.8cm、器高6.1cmを測る高盤であり、底径15.2cmを測り、強く外反する脚台をもつ。体部は緩やかに内湾し、口唇部は丸くおさめ、内面に一条の沈線がみられる。36は高台を有する須恵器の鉢であり、口径15.6cm、器高10.0cm、底径9.9cmを測る。体部は直線的に外傾し開く。以上のようにB40及び47の出土遺物からみれば、8～9世紀の官衙的性格をもつ遺跡の存在が考えられる。

3. 第3次試掘調査

第3次試掘調査は平成2年度に須江地区の北半部と植地区の一部をC地区として実施した。B地区と同様に須江地区は沖積面及び下段丘面が対象であるが、現集落と県道周辺は場整備事業地外なので除外し、 $2 \times 2\text{m}$ グリッド C 1~116を設定し、北部より順次調査を進めていった。今回の調査では、C区を南北に2分する県道領石山田線の北側においては、遺構、遺物を検出したグリッドは少なく、部分的に黒ボク土の厚い堆積がみられた。県道の南側ではB区と同じく下段丘面上のグリッドから遺物を多く出土している。県道北ではC53~54で須恵器、土師器が少量出土しており、C57では弥生時代中期の竪穴住居跡ではないかと考えられる掘り込みを確認した。掘り込みは弧状をなし、深さ30cmを測る。底面にはピットも検出され、土器片とともに石鐵が出土している。県道南ではC67~89にかけて須恵器、土師器を出土するが、C89を除き耕作土下の茶褐色粘質土(遺物包含層)は浅く、やはり削平等による2次堆積ではないかと考えられる。C89では茶褐色土下に赤ホヤ火山灰のブロックを含む黒ボクが約50cm堆積しており、B37と同様の状況を示している。C98では須恵器大甕片、C102~104ではやや磨耗しており段丘面からの流れ込みの可能性もあるが須恵器、土師器が出土した。この部分については道路、用排水路の計画にあたることから記録保存の対象とすることとした。

遺物は39~46がC57の住居跡ではないかと考えられる掘り込みから出土している。39~43はいずれも口縁外面に貼付をもち緩やかに外反する壺口縁であり、43のみ口径31.0cmと大きく、他は15.8~24.0cmを測る。39・43の口唇部には刻目が施される。44・45は底部であり、底径4.6cmと8.4cmを測る。46はサヌカイトの石鉄であり、全長5.2cm、全幅2.8cmを測る。47はC70出土の土師器の杯であり、口径16.6cm、器高3.6cmである。48はC77出土の土師器杯蓋であり、口径14.8cm、器高2.2cmで偏平なつまみをもつ。49は口径10.4cmの須恵器杯であり、C79から出土している。50・51は須恵器蓋であり、口径は24.8cmと14.0cmを測る。口縁部は強く外反し、50の口唇部はやや上下に肥厚し、51は上方にやや抜幅する。外面には両者ともに平行タタキ目を残す。50はC82、51はC89からの出土である。52~54もC89出土の土師器皿であり、口径16.4~19.4cm、器高2.2~2.8cmを測る。いずれも口縁部は小さく外反し、内面に浅い稜をもつ。53・54の内外面は明瞭なヘラ磨きがみられる。55~58の土壙は、55がC70、56がC87、57・58がC89出土である。59はC87出土の平頭式の鉄鎌であり、全長11.3cm、全幅2.4cmを測る。出土遺物からみればC地区の南半部、C89を中心とする範囲は、B地区のB37~49と同様な状況であり、やはり8~9世紀の遺構、遺物の広がりを確認することができた。

4. 第4次試掘調査

第4次試掘調査は平成3年度に新改・植地区を中心とし、D地区として実施された。新改・植地区とともに段畑、水田であり、 $2 \times 2\text{m}$ グリッド D 1~61を設定した。各グリッドとともに遺構、遺物は少なく、若干の須恵器、土師器、土師質土器等がみられたが磨耗しており、2次地

積と考えられる。しかし、D32では溝と土坑が検出されており拡張した結果、土坑中からは鉄軸の細頭奈及び土師質土器杯7~8個が出土している。グリッドの南には塚が存在しており、遺物からみれば近世の塚に關係した土坑と考えられる。

V ま と め

山田北部県営は場整備事業に伴う事前の試掘調査として、今回の調査を昭和63年度から平成3年度にかけての4ヶ年にかけて実施したところである。は場整備事業の対象地は、須江・植・楠目・油石の4工区、合計約146.4haと広大な範囲であった。油石工区を除き、須江・植・楠目の各工区内には周知の埋蔵文化財包蔵地が8ヶ所確認にされていたが、遺跡の範囲、性格等の正確な情報がないため工事によりいかなる影響が遺跡におよばされるか不明であった。このため工事の施行にあたっては、耕地事務所、土地改良区等は場整備関係者と教育委員会社会教育課を中心として協議を行い、事前の試掘調査の結果に基づき、工法変更による保存、やむをえない場合には記録保存の対応を行うことを確認した。

第1~4次調査の結果、楠目工区の前行・予岳地区では現況で残されている神母古墳、前行山1号墳は事業地外とすることとし、現況保存となった。試掘調査で土師器を出土した大元神社の南については2次堆積と考えられ、掘削深度も耕作土除去にとどまるため立会調査としたが、その結果周辺部はほとんど削平を受けており、遺構、遺物はみられなかった。第2次調査の行われた須江地区では、段丘南端部の須恵器、土師器を多量に出土した範囲について、切土工法のため平成2年度に全面緊急調査を実施した。その結果、かなり削平された部分も多いが、溝、ピット、土坑等を検出し、8~9世紀を中心とする多量の須恵器、土師器を出土しており、須江古墳群の關係からみても注目された。第3次調査対象地では、県道南の段丘面上で多量の須恵器、土師器を出土した範囲について、事前の発掘調査の必要性が示されたが、集落にも近いこともあり、今回のは場整備対象地から除外され、現況保存されることとなった。また、県道北の弥生時代中期の住居跡と考えられる部分とすでに削平されているが須江大塚古墳については、今後平成6~7年にかけて事業の施行時には緊急調査を実施しなければならない。また、段丘崖下の道路、用排水路部分については平成3年度に事前の緊急調査が行われ、遺構はほとんど検出されなかつたが、須恵器、土師器が出土している。第4次調査の対象地では、周知の遺跡である植カドタ遺跡、西クレドリ遺跡、モシリカワ遺跡が存在したが、調査の結果、出土遺物は流れ込みであり、工事による影響はないものと確認された。

以上のように試掘調査を実施することによって、現況保存または記録保存を行うことができ、さらに各遺跡についての詳細な情報も得ることができた。この結果を基に当該地域の埋蔵文化財保護を推進しなければならないが、特に須江地区においては多大な成果がみられ、当地区を土佐山田町内でも最も重要な地域として遺跡の保護とその解明に努めなければならない。

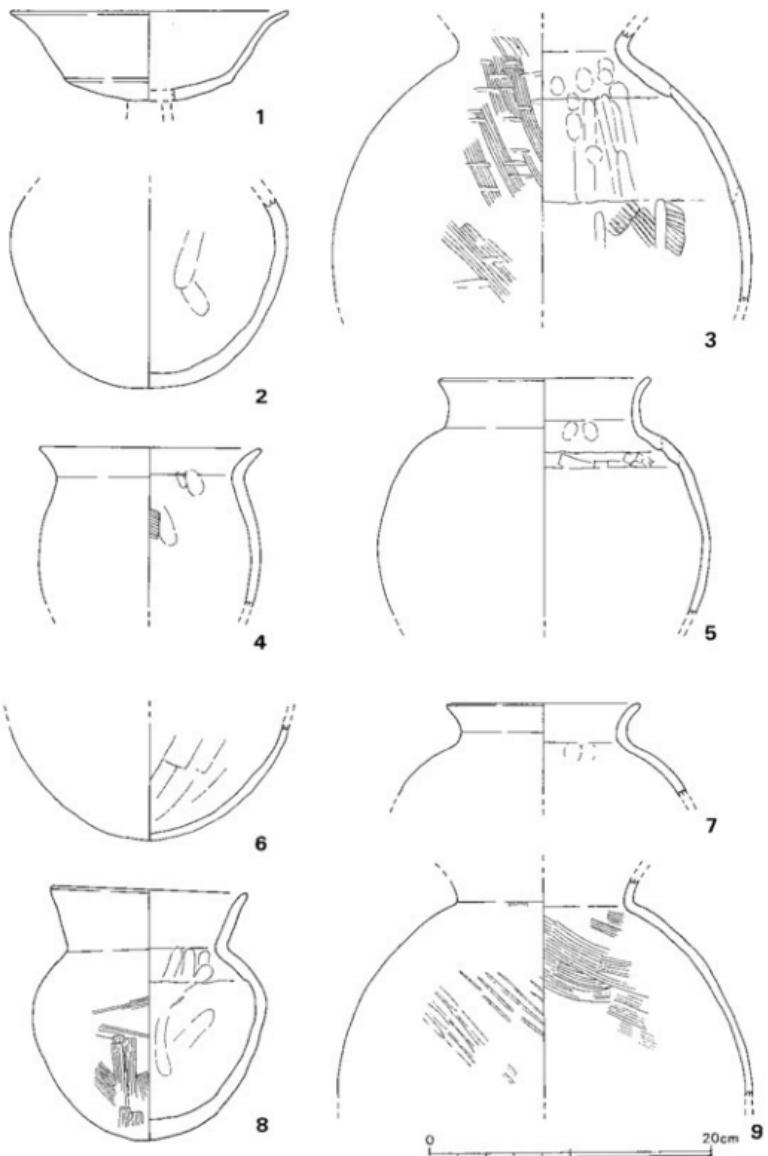


Fig.8 A30-32-33グリッド出土遺物

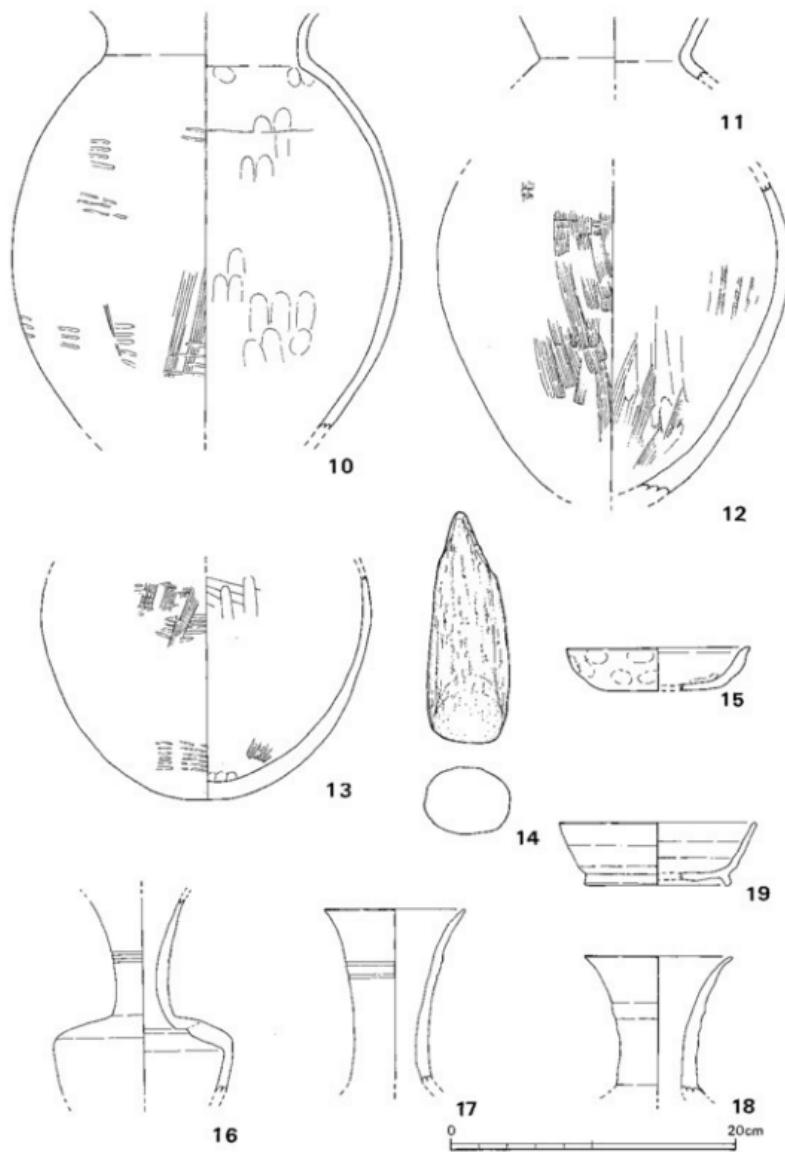


Fig. 9 A33-36-71-B40グリッド出土遺物

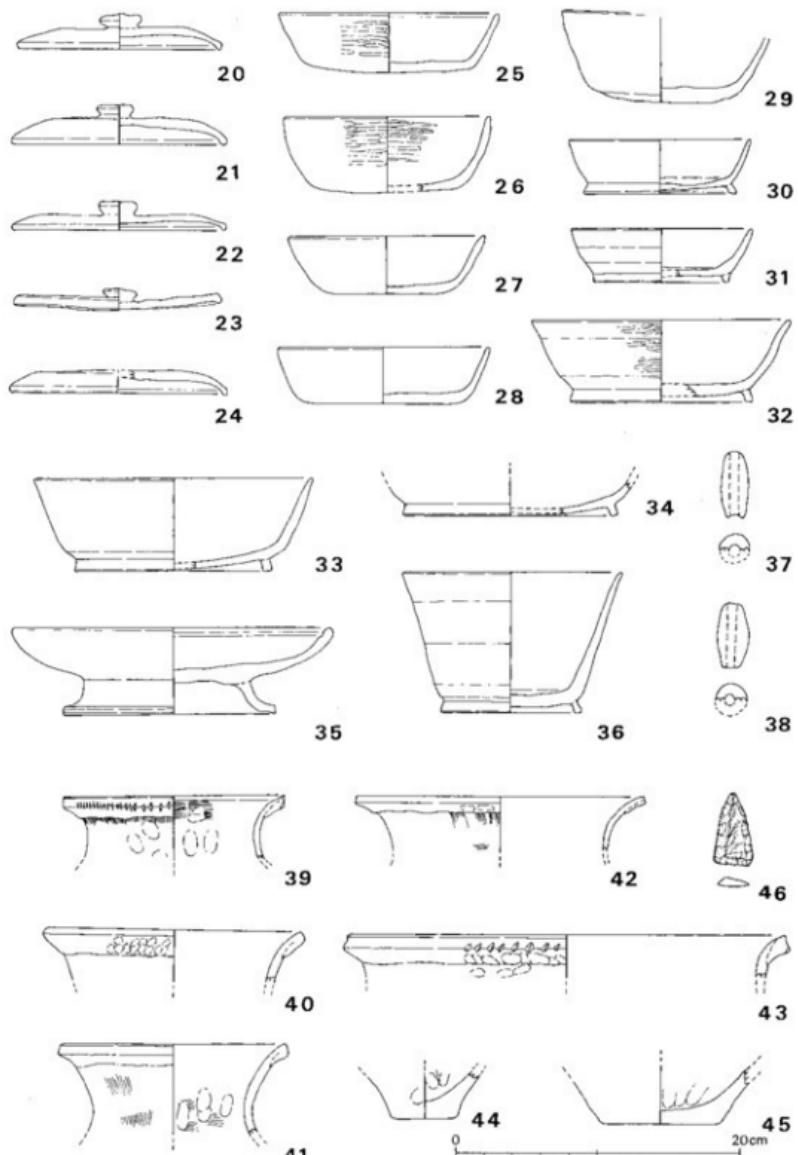


Fig. 10 B43-47-C57(ST1) グリッド出土遺物

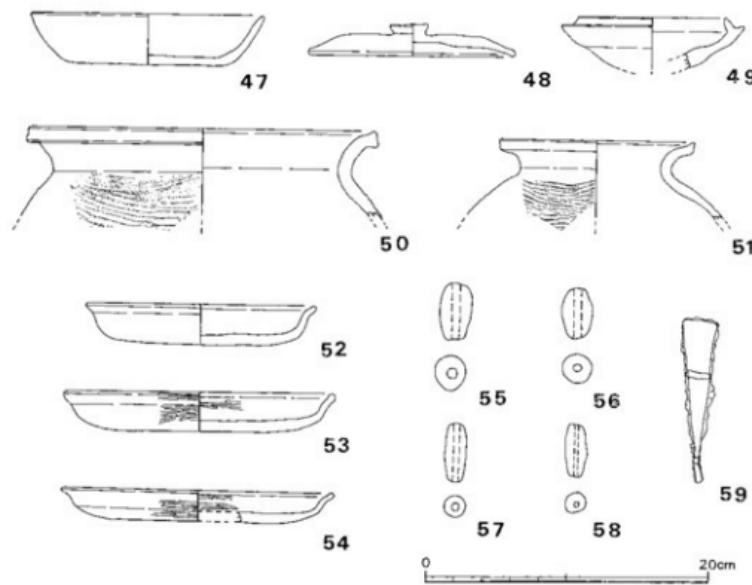


Fig. 11 C 70-77-79-82-87-89 グリッド出土遺物

写 真 図 版



須江・植地区航空写真 1
(B-C-D地区)

PL.2



須江・植地区航空写真 2
(B・C・D地区)



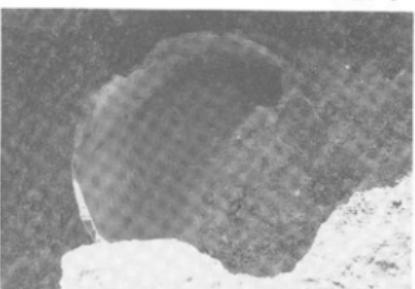
前行・予岳地区航空写真 1
(A・D・E地区)



前行・予岳地区航空写真 2
(A地区)



A32 グリッド



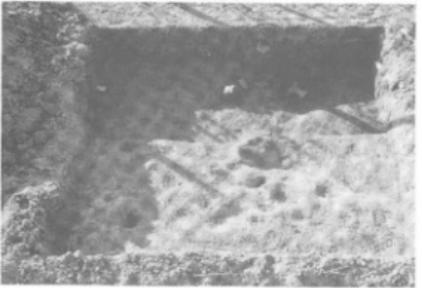
A33 グリッド



A33 拡張区



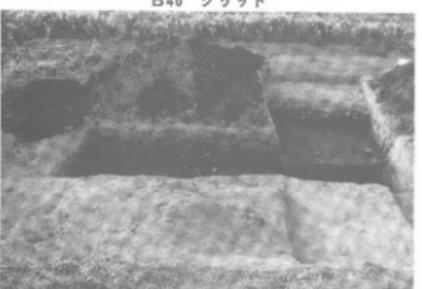
A33 拡張区



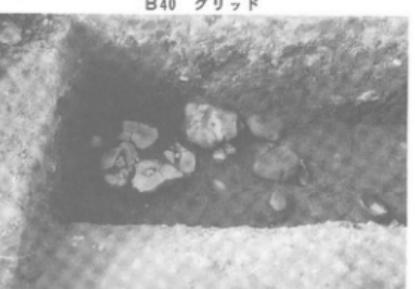
B40 グリッド



B40 グリッド

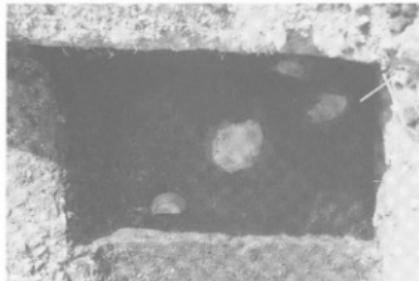


B47 グリッド



B47 グリッド

各グリッド遺物出土状態 1



B47 グリッド



B47 グリッド



B47 グリッド



B47 グリッド



B47 グリッド



B47 グリッド



B47 グリッド



B47 グリッド

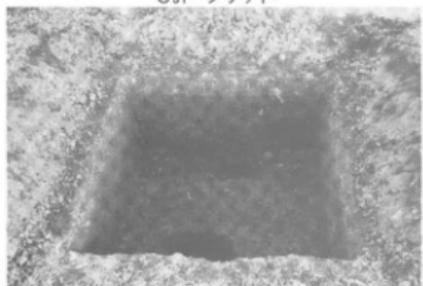
各グリッド遺物出土状態 2



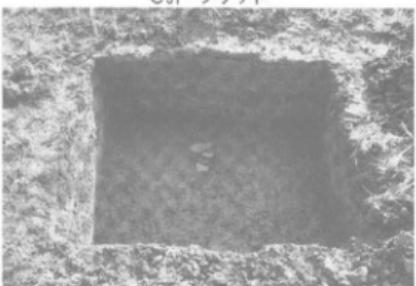
C57 グリッド



C57 グリッド



C89 グリッド



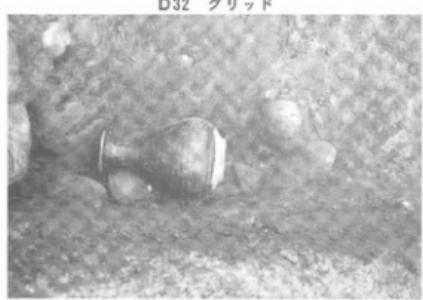
C98 グリッド



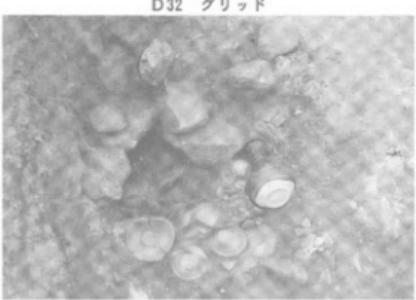
D32 グリッド



D32 グリッド



D32 グリッド



D32 グリッド

各グリッド遺物出土状態 3

土佐山田北部遺跡群

—山田北部県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財試掘調査報告書—

土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第12集

平成4年3月31日

編集・発行 土佐山田町教育委員会
高知県香美郡土佐山田町宝町1-2-1

印 刷 北 岡 印 刷 所
土佐山田町西本町1丁目